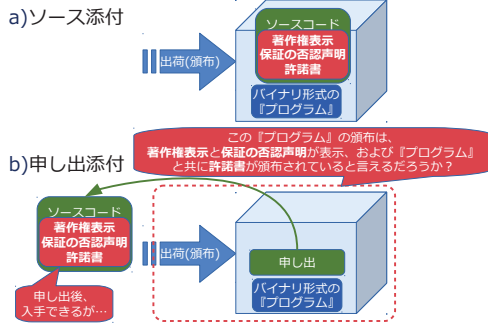


3. あなたは上記**第1条および2条の条件に従い、許諾条件1**(BSDライセンス相当)『プログラム』(あるいは第2条における派生物)をオブジェクトコードでない**実行形式**で複製または**頒布することができる**。 **許諾内容**
- ただし、その場合あなたは以下のうちどれか1つを実施しなければならない
- a) 著作物に、『プログラム』に対応した完全かつ機械で読み取り可能なソースコードを**添付する**。(中略)
- b) 著作物に、(中略)ソースコードを、(中略)提供する旨述べた少なくとも3年間は有効な書面になった**申し出を添える**。(以下中略) **許諾条件2**

この二つの行為を合わせて私は「ソース開示」と読んでいる。
ソース開示方法a)とb)のメリット/デメリットをご存じだろうか？

ソース開示方法の違いを図示



可能ならば、ソース添付がお勧め

- a) ソース添付
-
- GPLで、添付方法は問われていない。
 - バイナリと共に頒布されればよい。
 - だから、バイナリがWeb DLで頒布されるなら、同様の方法で
 - ソースもWeb DLで、という選択肢があるのも同じこと。

古典的なUNIX文化のようにソース頒布を基本に

-
- ソースコードで頒布して、ビルド。
 - updateもpatchファイルを作成し頒布
 - patchコマンドでソース更新しビルド
 - updateをpatchファイルで頒布するメリット
 - テキスト形式だから、GNU GPLv2第2条の条件を満たせばよい
 - ソース開示(GPLv2第3条)を気にしなくてもよい
 - バイナリのupdateもOSSのバイナリ形式での頒布で第3条ソース開示が条件
 - ソース開示していないことを指摘されたトラブルは少なくない
 - **トラブルが少ない対策案としてお勧め**
 - 他の案を選択するならば、トラブルに注意！**

ソース開示方法によるメリット/デメリット

ソース開示方法 による違い	a) ソース添付	b) 申し出添付
製品にソース格納媒体が	必要	不要
著作権表示・ライセンス	同梱済み	抽出要

コミュニティの多くは容認

- i. 「結局、入手できるから、いいじゃないか」(容認する)と思っているかもしれないし、
- ii. 実は、(容認するつもりではなかったけど) 条文を読みこなせていないだけかもしれない。
- b) 申し出添付
-

ソース格納媒体を製品本体にする対処案

- 一般に、製品のソース添付する場合、CD/DVDなどの媒体に格納して媒体添付する、と思われるが、**そう、GNU GPLに書かれては、いない。**
- 製品本体のディスク/メモリ内に格納するメリット。
- | | バイナリ
ソースコード | バイナリ |
|--------------------|----------------|-----------|
| 部材(原価)の増加 | なし | あり |
| 付属媒体の散逸の可能性 | なし | あり |
- 製品内ソースコードへのアクセス手段は、条件ではない

著作権を基にして、「結合著作物」で考えると

- GPLの伝播の誤解、例えば**
- ウィキペディアのGPLのライブラリの説明の何が、間違った言い分が、何が、正しい言い分が、わかる
- https://ja.wikipedia.org/wiki/GNU_General_Public_License ライブラリ
- …、次のようないくつかの異なる見解が存在する。
- 見解: プロプライエタリ・ソフトウェアを動的リンク、静的リンクすることはGPLに違反する
- 見解: プロプライエタリ・ソフトウェアを静的リンクすることはGPLに違反するが、動的リンクに関しては不明瞭
- 見解: リンクは無関係である

ソース開示方法b)申し出添付が選択される理由

1. なるべく、ソース開示したくない、という企業心理？
2. コモディティ製品では、CD一枚の部材増加は重い？

2007年、Skype社がGPL違反で提訴された事例

1. SMC社製IP電話をSkype社がWeb販売
 2. GPL違反を自覚し、一旦販売し停止
 3. ソースがWebから入手可能な旨を述べた申し出を添付の上、販売再開
 4. Harald Welte氏との裁判で**申し出**を添付したから起訴理由がなくなったと主張
 5. 判事が**ライセンス文(許諾書)**を付けなければならぬと述べ、10万ユーロの賠償金(?)。販売禁止の処分分の申立ては棄却。
- 裁判になると条文通りに「『プログラム』と共に頒布」しないと危険(?)**

ソースコードを提供する目的を考えてほしい

- 自由ソフトウェアとは？ <https://www.gnu.org/philosophy/free-sw.html>
- プログラムがどのように動作しているか研究し、必要に応じて改造する自由(第一の自由)。
- ソースコードへの**アクセス**は、この前提条件となります。
- (このバイナリ)プログラムがどのように動作しているか研究し、必要に応じて改造する、のだから
- バイナリにアクセスできているのが前提
- その前提ならば、その横にソースコードが格納されていて不都合はないはず。

トラブらないように、GNU GPLの理解をお手伝いします

- OSSライセンスと著作権法 講義(5H)
- 第1章 OSSは一般に他人の著作物
- 第2章 著作物の「利用」とは「著作権の行使」
- 第3章 ライセンス違反は著作権侵害
- 第4章 著作権行使の許諾と理解して各OSSライセンスの条文を読む
- 第5章 **結合著作物**に関する詳細と新たな問題
- 第6章 基本的な対策例
- 補遺 GPLv3について など
- 補遺2 体制例
- 次回、2019年3月8日(金) NEC本社で実施。
詳細は、<https://jpn.nec.com/oss/ossic/> 掲載PDF参照
- 一人8万円の公開(公募)セミナーの開催も可能
- 他社と同席、補遺テキスト無し、短縮4.5H

ソース開示方法b)申し出添付のデメリット

1. 添付後3年間は、受付対応が必要
 2. 第1条条件を別途満たす必要がある
1. それぞれの複製物において適切な**著作権表示と保証の否認声明**を目立つよう**適切に掲載**し、またこの許諾書および一切の保証の不在に触れた告知すべてをそのまま残し、そしてこの**許諾書**の複製物を『プログラム』のいかなる受領者にも**『プログラム』と共に頒布する**…

a) ソース添付ならば、ソース形式で「『プログラム』と共に頒布される」

許諾書等は『プログラム』と共に頒布がお勧め

-
- a) 抽出可能ならば問題ない。
- b) SDKとして提供されたLinuxディストリビューションから抽出するのは、なかなか大変。
- 抽出せずに「Ubuntu x.xが含まれます」の表現で済まされているケースが多。黙認されていると思われるが、もし突き詰められると根拠が弱い。

ソース開示していることが分からないのでは？

- GNU GPL遵守を**示す**ためにソース開示するのではない
- 再頒布されるプログラムも**自由ソフトウェアであるように**、GPLで条件付きの再頒布が許諾されている。
- 改変の自由(第一の自由)の対象にアクセスもしない、つまり、**バイナリにアクセスもしない受領者にソース開示していることを示すという条件はGNU GPLにはない。**
- ※それでも「**見えていなければGPL違反だ**」と言う人はいる。**GNU GPLを正しく理解していない**としか思えないが、煩わしさを回避するために媒体添付するという選択肢もある。

Orchestrating a brighter world

